

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises

日本ケベック学会ニュースレター

立花英裕先生追悼号

2022年 春・夏合併号

第13巻第1号(通算34号)

2022年7月31日発行

立花英裕先生への追悼文

ダヴィッド・ブルロット

(ケベック州政府在日事務所・前代表)

立花先生は、私が2019年7月に州政府代表として勤めることになった際、初めて出会った協力者の一人でした。最初の会合での議論は、私の記憶に今も強く残っていますが、それはダニー・ラフェリエール来日に関するものでした。ただ、この話題はすぐに他のテーマへと、同じくらいに情熱的なテーマへと広がりました。例えば、松尾芭蕉の詩、ケベック文学、ケベックの風光明媚な風景、バンド・デシネなどについてです。それら以上に、私が深く感銘を受けたのは、立花先生の「美しき州 Belle Province」に対する変わらぬ情熱と愛情そのものでした。

立花先生はケベックの友人であり、また州政府在日事務所の友人でもありました。その寛容さ、知的厳格さ、フランス語への愛情、優しさ溢れる振る舞いを、先生は残していかれました。また、フランス語への高い質の取り組みによって、2009年にはフランス語高等評議会(Conseil supérieur de la langue française)より、栄誉ある賞であるアメリ

カ地域フランコフォン功労賞(Ordre des francophones d'Amérique)を授与されました。ケベックやフランス語に残した豊かな遺産によっても、またその深い愛情を共有しようとする情熱によっても、先生が発たれた後に残された巨大な空白は埋められることはありません。

ケベックそして私自身の名のもとに、立花先生、すべてにありがとうございました。

(翻訳：廣松勲)



●本号の内容●

立花英裕先生追悼(ダヴィッド・ブルロット) ...1

立花英裕教授への追悼(クロード・イブ・シャロン) ...3

初対面の時のことなど(丹羽卓) ...6

立花英裕先生の思い出(小松祐子) ...9

立花英裕教授の思い出(スザンヌ・エティエ) ...2

三度目の出会い(立花先生の思い出)(小倉和子) ...5

光のなかの人、立花先生のご逝去を悼む(真田桂子) ...8

立花英裕先生を偲んで(橘木芳徳) ...11

立花英裕教授の思い出

スザンヌ・エティエ ケベック州政府在日事務所・元代表 (2008 年～2011 年)

私がケベック州政府代表として日本に滞在した折に、非常に短い期間ではあったけれども、それまで知らなかった素晴らしい方々にお目にかかる光栄に預かりました。そのうちの一人である立花英裕教授と出会い、2008 年から 2011 年の間に日本ケベック学会を通して、様々な活動に緊密に協力する機会を得られました。

東京、パリの大学で学ばれた日本の大学の教授が、これほどの感性とインテリジェンスをもってケベックの文化について表現をされことは、私が東京に着任する以前には全く想像することができませんでした。立花教授のこのような優れた能力は様々な機会に明示されましたが、私は特にアメリカ地域フランコフォン功労賞の受賞の際の演説に深く感銘を受けました。

ケベックの詩人たちの言葉によって、彼は私たちケベック人の世界のビジョン、多様性、異質性に対する開かれたビジョンに対する理解と感謝の念を表現されました。彼の言葉は深く、心を打ち、私たちにとって忘れ難いものとなりました。

立花英裕教授の追悼として、その演説文を引用致します。

「私にとってケベックは大きな発見でありました。それには様々な理由がありますが、ケベック人のデリケートな感性が私を魅了しました。私はケベック人の詩がとても好きです。例えば、Gatien Lapointe (ガシアン・ラポワント)。彼の『サンローラン河へのオード』からの抜粋を朗唱させ

て頂きます。

私のハーモニーが生まれたところに人を位置づけよう

私の言葉はアメリカ大陸のもの

この風景の中で生まれた私は

サンローラン河の泥土の中で息吹を得た

私は土であり、言葉である

そして、さらにその先にある私の好きな二行の美しい詩句を読みます。

人は空と大地の震えから生まれた

私は時の歩みの中で自らを実現するだろう

この二行の詩句を読む時、それを通して雪が落ちてくる大きな沈黙の空間を感じます。しかしながら、そこには雪という言葉はありません。どうしてかと自問してみます。それは多分、私は大雪が降る日本の北の地方で生まれたからなのかもしれません。子供の頃、果てしなく降る雪が渦巻く音を聞くのが好きでした。確かに、この詩には私が子供だった頃の神話的な時を追憶させる何かがあります。

また他方では、ケベック特有の世界のビジョン、多様性に開かれたビジョンを見出すことができます。多様性とは単に異なった人種や異質の文化だけではなく、思いがけない異なったものとの出会いの可能性をも意味します。例えばケベックと日本は遠く離れた国であり、異なった歴史をもちます。しかしながら、この世界の多様性のビジョンにおいてこの二つは出会い、宇宙の同じ生命の絶え間ない震えにおいて結びつく、と私には思えます。

ご出席の皆様、地球の反対側、はるか遠くにある極東にもフランス語を愛し、その歴史と言語に

大いなる敬意を持つケベックの人々を敬愛する日本人男女たちが存在することを知って頂きたいと思います。」

立花英裕教授がお亡くなりになったことを深く悼んでおりますが、彼がここに書き残した言葉は、日本とケベックとの間の理解を深めることに務める者たちにとって、インスピレーションを与える源として私たちの心の中に深く刻まれ、永続していくでしょう。



立花英裕教授への追悼

クロード・イヴ・シャロン ケベック州政府在日事務所・元代表 (2011~2013)

2011 年にケベック州政府在日事務所代表の公邸で行なわれた日本ケベック学会の理事たちの会合で、私たちは 2013 年に行なわれるケベック州政府事務所の 40 周年記念を祝う行事について、日本ケベック学会との協力について話し合いました。この写真の中には日本ケベック学会で現在も活動を行っているメンバーもおります。



立花先生との写真 (2011 年 12 月 15 日)

2019 年に立花教授は、日本ケベック学会のブログに 2013 年のこれらの行事について下記のように述べておられます。

「2013 年に行なわれたケベックと日本との関係 40 周年記念の行事の中で最も重要な企画は、ケベック州政府事務所の協力で実現することができた本の出版とウェブサイト『40 年間のケベックと日本との関係』の創設だと思います。

このウェブサイトは宮尾尊教授によって創設されました。このサイトには 50 人ものケベックと日本との関係を深めるのに貢献した方々とのインタビューのビデオが掲載されています。このサイトを通して様々な分野で活躍された方々の活動について知ることが出来ます。

日本語で出版された本『遠くて近いケベック、日ケ 40 年の対話とその未来』は故小畑精和教授が編集されました。ケベックの多様な側面を各章にテーマごとに分類し、様々な専門の方々の記事を掲載し、ウェブサイトに載せられたインタビューの日本語訳を挿入しております (<http://japon-quebec.com>)。

下記が掲載された立花教授とのインタビューの要旨です。今日の世界の多様性、世界の中でのケベックと日本の占める立場及び未来への展望について述べられています。

【インタビュー要旨】

質問 1: 立花英裕・早稲田大学教授、どうぞ自己紹介を兼ねて、これまでのケベックとの関係をご説明ください。

私の出発点は、フランス文学、フランス思想ですが、1980 年代後半にケベックを代表する詩人ガストン・ミロンの詩を翻訳して、フランスとは

違うフランス語の世界を発見しました。感性のあり方がまったく違い、自然に対する態度も異なります。それ以降、ケベックに興味を持つようになりました。そして決定的だったのは、ジェラルド・ブシャール氏の著書『ケベックの生成と「新世界」』を翻訳したことです。また最近ですが、ケベック州政府から「アメリカ地域フランコフォン功労章」をいただきました。

質問 2: それでは、現在、ケベックとの関係で、どのようなプロジェクトやご活動をしていらっしゃいますか。

一つは、作家ダニー・ラフェリエール氏を日本に紹介することです。すでに私は、2011 年に彼の書 著『ハイチ震災日記』を翻訳しています。彼は 1953 年にハイチで生まれ、23 歳の時にモントリオールに移住して作家活動を行っていますが、日本の俳句に通じるような精神を持っているので、ぜひ彼を日本でもっと広く紹介していきたいと思っています。

もう一つは、ジェラルド・ブシャール氏の提示している観点からケベックを研究することです。先ほど言及した著書の中で、彼は新大陸で新しい社会がどのように形成されていったかを研究し、ケベックを始め、ラテンアメリカ、カリブ海地域、オーストラリアなどを比較して、そこから今のグローバル化の時代を見据えています。私は、そのようなブシャール氏の視点を出発点として、現代のグローバル化世界における文化の多様性という問題を考えていきたいと思っています。

質問 3: 最後に今後の日本とケベックとの関係がどうあったらいいかお考えをお聞かせください。

ケベックを考えることは、日本が世界の中でどのような位置を占めるか、あるいはどのような役

割 を果たしていくのかを考えることと不可分な関係にあります。これまで日本は、西欧に追いつき追い越せという姿勢でしたが、21 世紀に入ってそのような姿勢は過去のものになっています。これからの日本の姿勢を考える上で、世界の中でのケベックの位置は大変興味深いものといえます。隣にアメリカという大国があり、またカナダという英語が主流の国のなかにあって、ケベックは自己を確立してきました。そのために強いアイデンティティを持っています。そこから日本が学ぶべきものはたくさんあると思います。そのようなケベックと関係を深めていくことは、日本にとって大変意義深いと確信しています。

* 立花教授とのインタビューは、下記のサイトで見る
ことが出来ます (<http://www.japon-quebec.com/japon/tachibana/tachibana.m4v>)。

2021 年 8 月 16 日に亡くなるまでなされた立花教授の日本ケベック学会への多大なる貢献、ケベックに関する著作に私たちは心から感謝しております。ケベック人も日本人も含めて私たちは立花教授が残してくれた研究、出版を通して多くを学び続けなければなりません。急速に変容しつつある新しい世界の秩序の中で、不確実性に満ちた今日、ケベックと日本がどのような位置を占めるかは、未来へ向けて重要な課題になるでしょう。それを考え続けた立花教授に深く敬意を評します。ありがとうございました。安らかにお休みください。
(翻訳: 平井みさ)



三度目の出会い (立花先生の思い出)

小倉 和子 (立教大学、AJEQ 顧問)

2021 年 8 月 18 日の夜、日本ケベック学会(AJEQ)の理事会メーリングリストに突然、立花英裕先生の訃報が舞い込みました。つい半月前まで、AJEQ では理事会や研究会、そして次期役員選考委員会などもあり、頻りに Zoom でお会いしていました。ご闘病中とはいえ、懇親会にまでつきあってくださり、いつもとあまり変わらない様子でしたので、まさかこんなに早く旅立たれてしまうとは想像もしていませんでした。

立花先生に初めてお会いしたのは、もう 35 年以上前のことです。パリ留学が同期でした。先生は国際大学都市に住み、私もそのすぐ近くに住んでいたもので、ときどき学食でお会いすると楽しくおしゃべりしたものです。その後、帰国してしばらく経ってから、仏検の問題作成にたずさわった時期があり、そこで再会しました。お互いに作問チームは異なっていましたが、出来上がった問題を出題者全員で検討する日があり、そのたびに、一捻りある面白い問題を作る方だな、と思っていました。職場から 1 年間の海外研究休暇をもらったのをきっかけに仏検の仕事からは離れましたが、その後、2008 年に日本ケベック学会の設立準備委員会で三たびお会いすることになります。

ケベック学会は、発足当初は会員数が今の半分ほどで、こぢんまりとした学会でした。とはいえ、たとえ小規模でも学会運営に必要な業務はそれほど変わりません。最初は手探り状態だったので、話し合いに多くの時間が費やされました。しかし、寒い地域を研究する人の中には熱い心の持ち主が多いようで、サークル活動の乗りで、と言った

らしかられるかもしれませんが、皆で懸命に活動を盛り立てようとしていました。中でも、初代会長だった故小畑精和先生の貢献が大きかったことは言うまでもありませんが、その後を引き継いだ私のさらに後、つまり学会の成熟期に第 3 代会長を務めてくださった立花先生の存在は測り知れません。運営面での手腕は誰もが認めるところですが、何よりも、ケベック研究に関して多くの興味深い視点を提示し、会員たちをやさしく励ましてくださいました。

立花先生の研究の原点は、19 世紀のフランス詩人ロートレアモンだと思います。南米のウルグアイに移住したフランス人の子として現地で生まれ、長じてフランスに戻りますが、散文詩集 1 冊と断章集を 2 冊だけ残して 24 歳で夭折した謎に満ちた詩人です。しかし、そこに繰り広げられる文学空間は稀有で、濃密で、難解。私なども、もし何かの事情で孤島に行くことになり、いつ戻れるか分からないけれど 1 冊だけ本をもっていけるとしたら、間違いなく彼の『マルドロールの歌』を選ぶだろう、などと思いながら読んだものです。立花先生はこのロートレアモン研究から南米のスペイン語圏を発見し、同時にフランス語教育の立場(仏検出題委員、NHK ラジオ・フランス語講座講師、日本フランス語教育学会会長などを歴任)からカリブ海を通して北米のフランス語圏に辿り着いたのだと思います。

カリブ海といえば、ハイチ出身のケベック作家で、今はアカデミーフランセーズ会員でもあるダニー・ラフェリエールの作品の翻訳や招聘でも、たいへんお世話になりました。先生の粘り強く、巧みな話術と交渉力がなければ実現しなかった

ことは、山ほどあります。

じつに幅広い（しかし、それぞれがかならずどこかでつながっている）研究をなさっていた立花先生は、とくに早稲田大学を定年退職した前後は多忙を極めていました。今にして思えば、やりたいこととやらなければならないことが山積して、無理をしたのではないのでしょうか。定年を迎え、これからは研究に没頭できると思った矢先にお亡くなりになったことが悔やまれます。

2020 年初めから世界を覆っているコロナ禍と先生の闘病生活は時期的に重なっていて、1 年半以上、対面ではお目にかかれなかったのに Zoom ではしょっちゅうお会いしていたというのも不思議な感覚です。対面だったら出席できなかったかもしれない会議や研究会にも、Zoom だから、入院先からでも他の人と同じように参加していただけたと考えると、コロナ禍をきっかけに一気に広がったオンラインの恩恵すら感じます。しかし、そのせいで、まだ、ほんとうにお別れした実感がなく、Zoom でなら彼方の国とも簡単につながれそうな気がしてしまいます…。

立花先生、多くの楽しく、忘れがたい時間を共有させていただき、ありがとうございました。ケベック学会設立 15 周年に向けたプロジェクトは、残された者たちでがんばりますので、どうぞ見守っててください。



ダニー・ラフェリエールと (2011 年 10 月、箱根にて)



初対面の時のことなど

丹羽 卓（金城学院大学、AJEQ 会長）

立花先生と最初にお目にかかったのは、2003 年ごろだったと思います。2000 年に出版されたジェラルド・ブシャールの *Genèse des nations et cultures du Nouveau Monde* の翻訳の仕事についてお話しするためでした。この本の監修者として、第 2 章の翻訳をご担当いただいた立花先生と相談する必要があったからです。数奇な経緯で私が責任を負うことになったこの書物の翻訳出版は、私にとって初の翻訳出版ただけでなく、監修などという大役まで引き受けていたため、重圧に押しつぶされそうでした。恐ろしく広い地域を扱い、しかも著者の深い知識と教養に裏打ちされたこの浩瀚な書物は、ブシャールのそれまでの研究成果の集大成で、それをできる限り誤りなく翻訳するには生半可な知識ではとうてい歯が立ちません。歴史学、社会学、文化論などの知識を十分備えてい

なければ、監修者など務まるはずもないのです。そこで頼りにしたのは立花先生で、理論的で一番翻訳がやっかいな第 2 章の翻訳を引き受けてくださるようお願いしたところ、快く引き受けてくださったばかりか、浅学の私をいろいろな点で助けてくださいました。実際、ピエール・ブルデューの研究者でもあった立花先生がおられなかったら、あの翻訳書は重大な間違いを含んだものになっていたかもしれないのです。

その立花先生と最初にお目にかかるため、待ち合わせたのは高田馬場駅。ケベック州政府在日事務所の天野さんの紹介で事前に何度もメールでやりとりはしていましたが、直接会うのは初めて。それなのに私は大幅に遅刻。高田馬場駅の正面出口ではない所から出て、しかも待ち合わせ場所もしっかり把握していなかったため、なかなかたどり着けず、携帯電話で連絡したとはいうものの、多分 20 分くらいお待たせしてしまいました。それにもかかわらず、にこやかに迎えてくださり、文句のひとつもおっしゃらないで、タクシーで研究室まで連れて行ってくださったのです。そこでひとしきり翻訳に関する打ち合わせをしました（というより、いろいろと教えていただいた）。この時の顛末を今でもはっきりと思い出せます。

この出来事は、立花先生という方の人となりの一面をよく表しているように思えます。初対面時に遅れて来た、年下の、しかも大して立派でもない研究者にこんな態度で接することのできる人は信頼できる。そう思いました。その後の研究室での話し合いはじつに実りの多いもので、私にとって啓蒙的さえありました。長く理論言語学やバイリンガリズムの研究をしていて、カナダやケ

ベックの研究に手を染めて数年しかたっておらず、人文学的素養が不十分な者には、立花先生のアドバイスは豊かで丁寧で、この時教えていただいたことがその後の翻訳作業の重要な基盤となりました。この書物以降これまで 3 冊の書物の翻訳をしましたが、いってみれば、それができたのも立花先生のおかげなのです。

2013-4 年には「レイシズムとエスニック・アイデンティティーカナダおよびカリブ海域を中心に」というテーマで立花先生が主宰される早稲田大学の特定課題研究会に誘っていただき、他の地域研究の方々との研究交流ができたのも良い思い出です。何人もの異分野の方を集めた研究プロジェクトが作れたのも立花先生の人望のなせるわざでしょう。他方、2016-7 年には私の所属する研究所のライシテに関するシンポジウムにもご協力いただき、公開シンポジウムには名古屋まで足を運んでくださいました。

この頃、立花先生はケベック学会会長に就任され、私が企画委員長・実行委員長を拝命し、以後 5 回の全国大会の企画運営の責任を負いました。さすがにこれは大変でしたが、それまでの立花先生への恩義を思えば、そんな形で先生を支えることができたのであれば嬉しく感じたものでした。その間、重要な局面には何度か突然電話をいただき、結構長い時間お話をしました。普段はメールのやり取りだったのに、基本的には直接のコミュニケーションがお好きだったのでしょうか。その時の、断言せず、相手を思いやりながら話す立花先生の語り口が今も耳に残っています。そこにもまた立花先生のお人柄が表れていたと思います。

こうして振り返ると、立花先生とは約 20 年に及

ぶ交流があったことになります。住む場所も遠く、個人的に親しかったわけでもないのに、親交が厚かったとは言えませんが、この間の私の研究活動にとって欠くことのできなかった方だったのは間違いなく、立花先生に多くのものを負っていることに感謝しています。本当に突然の逝去だったため、いまだに立花先生の不在が実感できません。また、何かの折にあの声で電話がかかってくるような、そんな気がするのです。



光のなかの人、立花先生のご逝去を悼む

真田 桂子 (阪南大学、AJEQ 副会長)

立花先生のご逝去から半年余りが経った。立花先生と親交のあった共通の友人から届いた今年の年賀状には、必ずといっていいほど立花先生の急逝を惜しむ言葉が添えられており、改めて沢山の方々に慕われていた先生のお人柄を偲んだ。

立花先生と私との出会いは、二十年近く前、ちょうど先生が日本フランス語教育学会(SJDF)の会長になられた頃に遡る。その当時はまだ、日本でフランス語圏文学研究は認識され始めたばかりで、それほど研究発表をする場所や機会に恵まれていたわけではなかった。日本フランス語教育学会は、他の学会よりいち早くフランス本国以外のフランス語圏に注目しており、ケベック留学から帰国して、ケベック文学について日本で紹介したいと思いつつも、適当な機会を探しあぐねていた私に手を差し伸べて下さった。2003 年の SJDF の全国大会で、ケベックに在住するユダヤ系の作家であるレ

ジーヌ・ロバンを招聘することになり、立花先生や橘木先生のお力添えもあり日本への来日が実現した。

その当時からすでに、エメ・セゼールやエドワール・グリッサンなどカリブ海地域フランス語圏文学の作家に深い関心を寄せていた立花先生であったが、ハイチ出身でケベックに移住したエミール・オリヴィエやダニー・ラフェリエールらに注目したことをきっかけに、ケベック文学研究にも踏み込まれ大きな足跡を残された。その後、故小畑先生らと日本ケベック学会の設立と発展に多大なご尽力と貢献をされ、亡くなるまで日本ケベック学会の会長を務められたことは改めて記すまでもないだろう。

立花先生の豊富な知識と研究成果を振り返ると、改めてその関心領域の広さに感服する。南米大陸とゆかりの深い 19 世紀フランスの異端の詩人ロートレアモン研究からはじまり、フランスの著名な社会学者のブルデュエの大著の翻訳と研究、そしてカリブ海地域フランス語圏文学の紹介、フランス語教育研究、さらに北米のケベック文学研究に至るまで、まさに世界の諸大陸と諸島をまたいだ縦横無尽な知的探求であった。また、立花先生は旺盛な知的好奇心とともに、人と人とを結びつける達人でもあり、いくつもの国際的で学術的なシンポジウムを企画し実現に導いた。

このように卓越した業績を挙げた学者であったにもかかわらず、立花先生はそのようなそぶりを微塵も見せず、いつも誰に対しても優しく、とても気さくに接して下さった。先生は周りにいる人の良いところをいち早く見つけて評価して、人を活かして自らも生きる利他的な生き方をされたよ

うに思われる。一方で立花先生にはびっくりするくらい頑固なところがあり、こうと思ったら譲らない一面を垣間見ることもあった。それは研究の姿勢にも表れていて、商社勤務を経てフランス語圏文学研究に打ち込まれてからは、一貫してマイノリティの側に立った視点にこだわり続けた。先生の残された翻訳や研究成果には、そんな先生の反骨精神が脈打っている。

立花先生の最晩年のお仕事となった『ケベック詩選集—北アメリカのフランス語詩』の編訳をご一緒できたのは私にとって僥倖であった。私のモントリオール大学留学時代からの恩師で、ケベックを代表する詩人、批評家であるピエール・ヌヴェー先生を AJEQ 全国大会のゲストスピーカーとして招聘することになり、それに合わせてケベック詩を翻訳したいとご相談したところ、立花先生は目を輝かせて賛同して下さった。そしてケベックの国民的な詩人であるガストン・ミロンやエミール・ネリガンの詩編や、「静かな革命」時代の記念碑的な作品であるミシェル・ラロンドの「スピーク・ホワイト」などを精力的に訳された。編集作業の打合せでときどき Facetime のオーディオで先生とお話する機会があったが、詩の翻訳が楽しくて仕方がないと青年のような純粋さを滲ませながら話され、ときには文学論に発展することもあった。そして、忙しさのあまり研究を進められずに悩んでいた私に、ちょっと湿ったような優しい穏やかな声で「真田さんがケベックで培った人脈は、(ケベック研究にとっての)宝だね」と言いながら研究を続けるようにと励まして下さった。

立花先生の死をどのように受け止めたらいいのであろうか。どこかで読んだが、死とはそれに見舞

われた本人のことではなく、それを受け止める側の出来事なのだ。立花先生の死は、穴のような欠落感でもなく、通り過ぎて行った疾風でもない。ダニー・ラフェリエールが、立花先生の面影を彷彿とさせ、その内面の本質までを見事に浮かび上がらせている追悼文のなかで、「...痛ましいのは彼ではありません。彼は光の中にいるのですから。...」と表現しているように、立花先生は光の中にいる。先生は、大作家の心の中にも、私の心の中にも、そして多くの人々の心の中に、その人柄そのものの温かな陽だまりのように生きている。

立花先生、本当にありがとうございました。もっともっとお話したかった、ご指導も仰ぎたかった。今はどうか安らかにとお休みください。そしてこれからも見守ってください。



立花英裕先生の思い出

小松 祐子 (お茶の水女子大学、AJEQ 理事)

立花先生の素晴らしいご功績の数々については改めてここで申すまでもなく、皆様よくご存じのことと思います。私は過去 20 年にわたり、主に日本ケベック学会、日本フランス語教育学会の二つの学会の活動を通して、立花先生のお仕事を間近で拝見し、多くを学ばせていただきました。穏やかで優しいお話しぶりの裏に、人並外れたパワーをお持ちで、常に粘り強く困難を切り抜け、着実に仕事を進められる先生の姿を、いつも尊敬をもって拝見しておりました。このたび追悼文の依頼をいただきましたので、いくつか個人的な思い

出をたどってみたいと思います。

はじめて立花先生にお会いしたのは 2000 年 7 月にパリで開催された国際フランス語教授連合世界大会の懇親会会場でのことです。当時 NHK ラジオでフランス語講座の講師をなさっていた立花先生は、私から見れば雲の上の存在でしたが、やさしく声を掛けてくださったことをよく覚えております。2003 年 5 月から日本フランス語教育学会の会長に就任なさいまして、私はその理事会メンバーに加えていただきました。先生のバイタリティを最初に目の当たりにしたのは、『フランス語で広がる世界—123 人の仲間』(2004 年、駿河台出版)の編集作業を通じてのことです。フランス語学習の価値を広く紹介するため、フランス語を使って各界で活躍する日本人の証言を集めた本を編集することになったのですが、予算はゼロ。並大抵の決意ではじめられる仕事ではありませんでした。立花先生の熱意にほだされた編集委員の私たちは、先生からのこまめなフォロー電話にせかされつつ(笑)、人脈をたどりインタビューに出かけ、原稿を集めていったのです。表紙や装丁まで知り合いにボランティアで引き受けていただくという手作りの出版でした。立花先生のリーダーシップなしには完成しえなかったものだと思います。私も十数名のインタビューや原稿執筆依頼を担当しましたが、そのなかの一人が日本ケベック学会初代会長の小畑精和先生であったことは、今思えば貴重な巡り合わせであったように思われます。

その後は立花会長のもとで、日本フランス語教育学会幹事長や大規模国際シンポジウム(「20 世紀の知識人」)の事務局長などの大役をお任せい

ただいて、毎週のように先生と電話で打合せをする日々が続きました。いつも状況を的確に見極め、アイデアに満ちた魅力的な企画を立てられ、着実に実行なさるエネルギッシュなお仕事ぶりに感嘆するばかりでした。半面、独特のユーモアで絶えず周囲を和ませてくださる方でもありました。

立花先生が 2009 年にフランス語教育学会長の任期を終えられる少し前に、日本ケベック学会が設立されました。今度は新しい学会のほうで、ダニー・ラフェリエール、ウーク・チョングなどの著名人招聘や出版プロジェクトを次々に実現なさったことは皆様もよくご存じのとおりです。日ケ交流 40 周年の際には、『遠くて近いケベック：日ケ 40 年の対話とその未来』(2013 年、御茶の水書房)の出版などの記念事業に多大な貢献をなさいました。

私は立花先生の出版や企画のお手伝いをさせていただくことが多く、苦労も多かったのですが、その分立花先生の人間的な側面に多く触れさせていただくことができたように思います。学会外でも日仏経済交流会による『フランス人の流儀』(2012 年、大修館書店)という本の編集に参加させていただきましたが、この本の編集会議中に東日本大震災が発生し、立花先生と一緒にテーブルの下にもぐって揺れが収まるのを待ったことは、忘れられない思い出になりました。先生とのおしゃべりであまり恐怖を感じずに過ごし、そのあと街に出て惨状を目の当たりにしショックを受けたのでした。

国内外各地への学会出張のおりの様々な思い出も、走馬灯のように浮かびます。なかでも、2008

年ヶベック市で開催された FIPF 世界大会のこと、レストランのテラスや 400 周年記念スペクタクルの会場で、立花先生とお話しした内容やそのときのご様子が今も鮮やかによみがえってまいります。

いつもフランス語やフランス語圏文学について愛情あふれるお話をなさっていました。先生のご活動は本当に幅広く、また深いものでした。ご闘病とパンデミックのためになかなかお会いできない日が続きましたが、7 月に久しぶりにお電話をいただいたときには元気なご様子で、これからの仕事の計画を、いつものゆったりした口調で、情熱的に語っていらっしゃいましたので、8 月半ばの訃報に接して愕然といたしました。先生が残してくださった多方面にわたるお仕事とご遺志は今後も間違いなく引き継がれていくことでしょうし、私たちはそうしていかなくてはならないと思います。立花先生、これまで本当にありがとうございました。どうぞ安らかにお休みください。そしてこれからも私たちをそっとお見守りいただけますようお願いいたします。



立花英裕先生を偲んで

橘木 芳徳 (暁星学園フランス語教育顧問、AJEQ 会員)

2021 年 1 月の始めに、立花先生から私の携帯に電話がかかってきました。「橘木さん、白内障の手術を受けようと思うのだけど、近くのものが見えやすいようにするのがいいのか、遠くを見るため

の視力を上げるようにするのがいいのか、手術の経験のある橘木さんはどちらの方がいいと思いますか？」と尋ねられ、「私はひどい近視で遠くの物や特に人物の見分けができず相手の方に失礼な態度を取ったこともありましたので、遠くが良く見えるように視力を上げてもらいました。でも先生は頻繁に書物を読まれ、また辞書などは文字も小さいので、近くのものをはっきりと見えるようにされる方をお勧めします」と、返事いたしました。実際、そうされたと後で伺いました。その後も研究会、理事会、AJEQ 全国大会などを立花会長が中心になり、重病を隠しつつ最後まで積極的に遂行されました。その精神力、活動力に敬服しています。

5 月にはフランス政府より立花先生に *Palmes académiques Officier* 章が授与されることになり、仏大使館での叙勲式に招かれました。その日は私の誕生日でありましたが、ご招待は何よりも名誉なことですので、二つ返事でお受けいたしました。その前に私自身も仏大使館で叙勲の式典があり、立花先生にご臨席をお願いしていましたが、ちょうど入院されていて出席できない旨のご返事をいただいていた。今回の立花先生の叙勲式には是非とも参列して久しぶりに先生の元気なお姿を見られると喜び勇んで出かけました。そして直接、先生に祝福の言葉を述べることができましたことは光栄の至りでした。当日は当然ながら奥様もお嬢様もいらして、ご家族とご一緒の立花先生のあの優しい笑顔は今でも忘れられません。

先生の研究者、教育者、また学会の会長としての数々の業績は枚挙に遑がありませんが、会員の

方々は皆さんご存知ですので、ここでは割愛させていただきます。

立花先生との関係は、今から遡ること 30 年近く前になります。「日本語表現からフランス語表現へ」というテーマで、2 チームに別れて勉強会を始めました。私の属する研究チームは上智大学のメランベルジェ先生を中心に 4 名、他方チームは同じく上智大学のロベルジュ先生を中心にした研究グループで、立花先生は後者のメンバーでした。立花先生も私も上智大学の出身ではないのですが、それぞれ何かの縁でこの研究会の一員になっていたのです。その時点ではまだ面識はありませんでした。いずれ共同研究する予定になっておりましたが、そのうちに立花先生が在外研究で欧州に行かれ、会わずじまいでした。

そして初めてお会いしたのが、1996 年 8 月、慶應義塾大学三田校舎で約 1 週間にわたり行われた国際フランス語教授連合 (FIPF) 第 9 回世界大会の準備会議の時でした。世界 110 カ国から 1000 名以上のフランス語の先生方が参加された大規模な大会でした。私はその前年度にフランス語教育学会 (SJDF) の幹事長をしていました関係上、大会実行委員として主として外国から来られた大会参加者たちの宿泊・滞在の担当をいたしました。立花先生は在外研究から帰国されて間もない頃でしたが、同じく人事管理・総合案内担当の長を引き受けてくださいました。大会前は連日のように数十名の実行委員が集い、大会準備会議が行われていました。立花先生と実質的に初めてお会いしたのはその時でした。それ以来、立花先生とは、二人の苗字の漢字は異なっていますが、音がタチバナとタチバナキと似通っていることや年齢

もほぼ同じでもあり、また上記した研究グループのメンバーとして、お互いに名前だけは知っていましたので、その後、親しくお付き合いさせていただきました。

2008 年夏にケベック市で開催されました FIPF の第 12 回世界大会には、二人とも初日の受付会場から一緒に参加し、現地で有意義な 1 週間を過ごすことができました。初日、「橘木さん、シカゴ空港で私のスーツケースが紛失してしまったようだけど、航空会社が責任をもって私のホテルに今日中に届けると言っているので大丈夫でしょう。慌ててもしょうがないし、ここは信用しなくてはね」と、心広く平然とされていたお姿も印象に残っています。

そして翌年 2009 年 7 月、FIPF 第 9 回世界大会の記念事業の一環として「Le français dans l'enseignement secondaire en Asie de l'Est = 東アジアの中等教育におけるフランス語」という主テーマを掲げ、フランス大使館後援のもと、立花先生が組織委員長となり、早稲田大学の国際会議場 (井深大記念ホール) で国際シンポジウムが開かれました。韓国、香港、フランスよりパネリストとして先生方をお招きし、また日本で行われている中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語の各外国語担当の先生方に自分の実践経験を発表してもらい、さらに複言語教育や高大連携にも言及した意義ある大会でした。組織委員長の立花先生が実行委員 6 名を任命され、大会の半年ぐらい前から定期的に早稲田大学の立花研究室に集まり、真剣ながらも和気藹々とした雰囲気のもと、準備委員会を重ねました。そこでもまた私たちは皆、立

花先生の責任感の強さと面倒見の良いお人柄にますます親近感を覚えたものでした。

学問、研究部門の専門家としては勿論ですが、SJDF の会長を務め、また AJEQ の会長職もご逝去の直前まで、積極的に果敢に遂行された立花先生の神髄は私たちの記憶にいつまでも刻まれていくことでしょう。立花先生、ケベック文学研究を通して、私をフランス語圏異文化理解へと導いてくださり、本当にありがとうございました。



授賞式での立花先生 (橋木撮影)



●編集後記●

新しい体制のもと、広報委員として NL を初めて担当することになりました。その最初の NL としてお送りすることになったのが、本号「立花英裕先生追悼号」です。ただ、一周忌を前にして大きな喪失感はまだ拭い去ることはできず、編集作業もなかなか進めることができませんでした。追悼文 (や写真) を寄せていただいた皆様には、この場を借りて深くお詫び申し上げます。

本号には、研究や教育、そして広く日ケ関係や日常的場面に至るまで、立花先生と深いつながりを持たれていた 8 名の方々から、ご寄稿をいただきました。いずれの追悼文においても、私の知らない・知らなかった立花先生の姿が思い起こされ、先生の残されたことの大きさが窺い知れます。歴代のケベック州政府代表の方々からも貴重な思い出を共有していただき、私が知る以前の先生を知る機会ともなりました。

AJEQ に留まらず、先生の影響を受けつつ研究・教育を続ける“教え子”たちは少なくありません。これからも先生の言葉を、あの穏やかで明晰な言葉たちを思い起こしつつ、新たな方向・形態においてフランス語の世界に関する研究が発展していくことを望まずにはられません。先生、ありがとうございました。(IH)

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：丹羽卓 編集人：廣松勲